# 二〇二五年度　同朋大学　社会福祉学部
# 学校推薦型選抜（公募）小論文　問題用紙

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「子どもたちに豊かな発達を」「障害のある人の発達保障を」というとき、私たちは何を実現しようとしているのでしょうか。発達保障について考えるとき、大切になるのが「発達」のイメージです。そもそも「発達」とはどういうことなのでしょうか。

通常、「発達」という言葉は、人間が質的に新しい能力を獲得していくときに使われることが多いと思います。「ハイハイしていた子どもがうまく歩けるようになった」「話す単語の種類が大きく増えた」「スプーンでなく箸を使って食事ができるようになった」「ひらがなを理解して書くようになった」「作業の段取りを自分で立てられるようになった」といったときに、子どもの「発達」を感じることがあるかもしれません。それらのことは、確かに人間の「発達」を示すものであることが多いでしょう。しかし、発達保障が語られるなかでは、より高度な能力を獲得していくことにとどまらない、もっと幅広い「発達」のイメージがつくられてきました。

そのイメージを理解する鍵となるのが、「ヨコへの発達」です。能力の高度化という「タテへの発達」に対して、能力を発揮できる幅が広がることについて「ヨコへの発達」ということがいわれてきました。

茂木俊彦氏は、「能力のレベルは同じままだが、それを使う場面や相手がちがっても発揮できるようになったという変化があれば、この変化もまた『発達』とみるべきだと考えられてきました」と説明しています。「親には自分のほしい物を伝えられていた子どもが、保育士に対しても要求できるようになる」「特定の教師がいっしょなら給食を食べられていた子どもが、別の教師とでも給食を食べるようになる」といったことが、「ヨコへの発達」に当たるでしょう。いわゆる発達段階が進むということがなかったとしても、「ヨコへの発達」は無限にあり得るといえます。

このような「ヨコへの発達」によって、それまでに獲得した力や「タテへの発達」がさらに活かされるとも考えられます。たとえば、基本的な調理の技能を身につけることは、料理のレパートリーが増えることで、実際の食生活の充実につながるでしょう。また、言葉の力も、家族との間だけでなく、グループホームなどでも発揮できたほうが、本人の生活が心地よいものになるはずです。「気後れや自信のなさから黙ってしまうことの多かった人が、自分からグループホームの職員に話しかけるようになる」「一度言って相手に伝わらないとあきらめていた人が、あの手この手で粘り強く伝えようとするようになる」といった変化は、貴重な「発達」だといえるでしょう。

大切なのは、能力の高度化という側面だけで「発達」を考えないということです。何が「タテ」で何が「ヨコ」なのかを厳密に区別することや、「ヨコへの発達」という概念について細部にわたり議論することは、それほど重要なことではないでしょう。人間が自らの自由度を高め、生活を豊かにしていくための力を、より広い視野でとらえることが肝心です。

発達保障を考えるときの「発達」の内容は、能力の向上や拡大だけではありません。様々な力の獲得と無関係ではありませんが、気持ちの育ちや価値意識の深まりなど、人格が豊かになることも、「発達」の大切な内容として考えられてきました。

障害のある子どもの放課後活動を例にみても、日々の遊びや生活のなかでの気持ちの育ちが注目されていることがわかります。ある指導員は、「太鼓の活動を始めた当初は離れて背を向けていた子が、三年目の舞台発表では、最前列で叩く姿を見せた」ことを語っています。ここで指導員が喜んでいるのは、子どもが太鼓のスキルを身につけたことではないはずです。ほかの子どもと同じようにできたという形式的なことでもないでしょう。その子どもに自信が生まれたことや、仲間のなかでの安心感が育ったことを、共感的に喜んでいるのではないでしょうか。また、別の指導員は、「スケジュールにとらわれがちだった子どもが、帰ってホットケーキづくりをするか公園で遊ぶか迷った」ことを記しています。子どもが自分なりに考えて悩む姿が「とてもうれしかった」というのです。予定通りに行動できることではなく、気持ちの柔軟さのようなものが大事にされているといえるでしょう。

こうした人格的な側面は、どちらかといえば年齢の高い人の「発達」を考えるときに、重要性が大きくなるかもしれません。共同作業所づくりの取り組みのなかでは、「働くなかでたくましく」ということが言われてきましたが、これも人格的な「発達」に重点を置く言葉だといえるのではないでしょうか。「草刈り作業を喜んでくれる人のために、しんどいけれどもがんばろう」という姿勢や、「失敗してしまったけど、もう一度やってみよう」と思える強さなどが、「たくましさ」と表現されるのだと思います。また、「これは難しいから手伝って」と頼めること、「体調が悪いので今日は仕事を休もう」と判断できることも、一つの「たくましさ」かもしれません。そして、「仲間とおしゃべりをしながら楽しく袋詰めをするようになる」「自分が織った布の手触りを満足そうに確かめ、作品を人に見せるようになる」といった姿は、人への関わり方や仕事への構えの充実を示しているように思えます。

このような人格的な豊かさに目を向けるということは、人間の内面を考えるということでもあります。目に見えるスキルの

獲得や向上ばかりが目標にされると、本人の気持ちや思いが軽視されていく可能性があるでしょう。一定の時間内に目標数の器を作れたかどうかといったことが評価され、作業のなかで本人が何を考えたのか、仲間と楽しく取り組めたのか、達成感はあるのかといったことが見落とされるかもしれません。人間の内面をとらえようとすることに、私たちは意識的になりたいと思います。

もっとも、能力の獲得と人格の形成とが、まったく別々に進むわけではありません。自分の力の伸びを実感したり、何かを達成したりするなかで、自信が育つということがあるはずです。また、自分の仕事の意義を知り、自分の役割を認識できることが、誇りや責任感につながるかもしれません。力の獲得と人格の形成とは、統一的に考えられる必要があります。

（丸山啓史・河合隆平・品川文雄『発達保障ってなに?』全国障害者問題研究会出版部、二〇一二年）

問１　右の文章を二〇〇字程度で要約しなさい。

問２　傍線部「人格が豊かになること」は、「発達」の内容として大切に考えられていると文中で述べられています。文章の内容を参考にしながら、あなたはどのようなことを大切にして利用者もしくは子どもにかかわりたいと考えますか。あなたの意見を六〇〇字程度で述べなさい。